

横浜市立横浜総合高校 におけるカフェ相談活動の 取り組みと意義

平成 28 年度 教員地域貢献活動支援事業報告書

平成 29 (2017) 年 3 月

横浜市立大学

目次

はじめに	1	横浜市立大学教授 高橋 寛人
1 高校「居場所カフェ」の広がり		
2 現代の高校生の抱える様々な困難		
3 困難の解決は教師では不可能		
4 本報告書の概要		
第1章 横浜総合高校における交流相談カフェ	6	横浜市立横浜総合高等学校長 天野 真人
1 横浜市立横浜総合高等学校の概要		
2 86名／1136名		
3 66% → 77%		
4 130名 → 95名		
5 67名 → 106名		
6 122人／1136名		
7 900+500件		
8 相談需要の量と質の変化について		
9 相談カフェへの期待		
10 現時点の状況		
11 今後の展望		
第2章 横浜総合高校における交流相談カフェと就職指導	10	横浜市立横浜総合高等学校主幹教諭 飯森 収
1 横浜総合高校の生徒たち		
2 「交流カフェ」の魅力		
3 就職への効果		
第3章 交流相談カフェを通じた「居場所づくり」	12	公益財団法人よこはまユース 尾崎 万里奈
—横浜総合高校「ようこそカフェ」の取組—		
1 「ようこそカフェ」の様子		
2 「ようこそカフェ」から見る「横浜総合高校」		
3 「ようこそカフェ」のオープンに向けて		
4 「なんてことないおしゃべりができる場所」を目指して		
5 「ようこそカフェ」の未来		
第4章 校内カフェを通して見えること	19	公益財団法人よこはまユース 富岡 克之

1	学校内に居場所がある意味	
2	安心できる場があるということ	
3	スタッフとしての楽しみ	
4	多様性を生む場づくり	
第5章	困難を抱える高校生のメンタルヘルス	23
	～横浜総合高校「ようこそカフェ」での相談機能を通して	
	横浜メンタルサービスネットワーク理事 鈴木 弘美	
	はじめに	
1	高校生たちのつぶやき	
2	吐きだす仕組みづくり	
3	吐きだすことを拾う	
4	潜在する要支援学生	
	おわりに	
第6章	定時制高校でのキャリア支援としての「校内居場所カフェ」を考える	26
	NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ (ME-net) 事務局長 高橋清樹	
1	定時制高校の今	
2	定時制高校の生徒が卒業する割合は？	
3	ME-net が提案する定時制や通信制でのキャリア支援とは	
4	横浜総合高校での「カフェ活動」の始まりは？	
5	カフェ活動の実施に向けて	
6	大学生スタッフの役割	
7	大学生の感想から・・・	
8	カフェの定着に向けて	
第7章	高校カフェの「居場所」と「相談」機能	33
	横浜市立大学教授 高橋 寛人	
1	高校「居場所カフェ」とは	
2	生徒主体の問題解決の必要性	
3	高校「居場所カフェ」の意義と効果	
[資料]	平成28年度研究会開催状況等	38

はじめに

横浜市立大学教授 高橋 寛人

高校「居場所カフェ」の広がり

近年、高校で「居場所カフェ」、「交流相談カフェ」と呼ばれるものが開かれるようになった。これは主に、困難を抱える生徒の多い高校で、週に1回または1か月に2回程度、学校内の空き教室などを利用して、生徒がドリンクを飲んだりお菓子を食べながら、生徒どうし話したり、学生などのボランティアと交流するものである。学校の教員ではなく、ひきこもり対応や就労支援などの若者支援で実績のある団体が運営し、生徒の相談に応じて支援を行う。

その第1号は、2012年度より大阪府立西成高校で始まった「となりカフェ」である。大阪府の委託事業として一般社団法人「ドーナツトーク」が委託を受けて運営している。2013年度、府立桃谷高校も加わった。2015年度から大阪府の「高校内における居場所のプラットホーム事業」となり、「ドーナツトーク」は府立4校すなわち西成高校「となりカフェ」、桃谷高校「ほとりカフェ」のほか、長吉高校「なかカフェ」、泉尾高校「わたしカフェ」も担当するようになった。2016年度前半に委託事業はいったん切れるが、11月より復活する。「大阪府・高校内における居場所のプラットホーム化事業」と名称変更し、府内20校の高校で8つのNPOが受託展開した。

この事業は2017年度からは教育委員会の事業となった。事業名は「課題早期発見フォローアップ事業」である。大阪府の予算編成公式サイト¹で、この事業についての説明を見よう。事業の目的は次の通りである。

民間支援団体（NPO）と連携し高校に居場所を設けることにより、課題を抱える生徒を早期発見する。外部人材を活用し、関係機関につなぐ。

「内容」の欄には以下のように記載されている。

高校内の居場所に民間支援団体（NPO）を配置することで、支援が必要になりそのような生徒を早期発見し、登校の動機づけを行う。さらに、学校の特色に応じた外部人材を配置し、支援が必要な生徒と学校外の関係機関をつなぐ。

成果発表を行い、外部人材の活用方法、生徒の支援方法などの情報を公私で共有し、各校が持てる強みや特色を生かし、それぞれの教育力向上に努める。

そして、「成果指標」の欄には次の2つが掲げられている。

平成27年度の対象校の不登校生徒数1,176人を10%減少させる。

学校満足度の上昇（学校教育自己診断等）

不登校生徒の減少と学校満足度の向上をめざして、民間支援団体に委託して高校に居場所を設けることにより、支援が必要な生徒を早期発見して登校の動機づけを行う

¹ 大阪府予算編成過程公式サイト「平成29年度当初予算（政策的経費）課題早期発見フォローアップ事業費」<http://www.pref.osaka.lg.jp/yosan/cover/index.php?year=2017&acc=1&form=01&proc=6&ykst=2&bizcd=20170584&seq=1>

とともに学校外の関係機関につなぐという事業である。

大阪府立西成高校の「となりカフェ」と並んで有名なのが、神奈川県立田奈高校の「びっくりカフェ」である。どちらも新聞、テレビ、雑誌などにくり返し取り上げられ、また、ネットを通じて関係者の間で情報が交換されてきている。田奈高校の「びっくりカフェ」は、西成高校の「となりカフェ」をまねて2014年度にはじまった。ただし、田奈高校のカフェは学校図書館で行っている点に大きな特色がある。田奈高校では以前から、司書の松田ユリ子さんが、生徒が気軽に入室できて、居場所になるような図書館づくりを進めていた。そして、2011年から「びっくり図書館」と名付けて「交流相談」を始めた。オープンな図書館での交流相談の際に、ドリンクを提供したのが「びっくりカフェ」であった。運営団体は「NPO法人パノラマ」である。

川崎市では、川崎市立川崎高校定時制で「ぼちっとカフェ」が開かれている。同校は、夜間部のほかに昼間部も持つ定時制である。2014年10月に川崎市の福祉施策の一環としてはじまり、2016年度からは市教育委員会の「生徒自立支援業務委託事業」となった。委託団体は、川崎市ふれあい館を管理している社会福祉法人青丘社である。

横浜市立高校でも、2016年秋から横浜総合高校で「居場所カフェ」がはじまった。横浜市立横浜総合高校は3部制の定時制高校である。同校の「ようこそカフェ」は、青少年の育成活動に実績を持つ公益財団法人「よこはまユース」、NPO法人「横浜メンタルサービスネットワーク」、そして外国につながる子どもたちの支援を行うNPO法人「多文化共生教育ネットワークかながわ」の3団体が共同で運営している。外国につながる子どもたちは、日本語がうまくできないなどの理由で、全日制に進めずに定時制高校に進学するケースが多い。NPO法人「多文化共生教育ネットワークかながわ」は川崎市立川崎高校定時制で、外国につながる子どもたちへの学習支援も行っている²。

現代の高校生の抱える様々な困難

現代の高校生は、以前とは異なる様々の困難の中で高校生活を送っている。20世紀の末頃まで、卒業と就労は連続的に結びついていた。しかし、バブル崩壊後、経済の停滞が続いた。加えて、労働法制の規制緩和とくに派遣法の度重なる改正で、正社員が減って非正規雇用が増えた。とくに高卒者に対する正規労働の求人数が減った。

民間労働者の平均年収は、1997年の467万円が2013年に414万円に下がり³、1世帯の平均所得は1994年の664万円が2013年には529万円と135万円も減少している⁴。

労働者の所得が大幅に減少する中、デフレ傾向の時代にもかかわらず、大学の学費は上がり続けている。とくに国立大学の学費の上がり方は激しい。2015年末、財務省は国立大学への運営費交付金を段階的に削減することを発表した。この削減分を授業料の値上げで補うとすると、14年後には約93万円に上がるという計算である。下宿生活をす

² これも毎週1回程度行われ、「ふらっとカフェ」と名付けられている。

³ 国税庁『民間給与実態統計調査結果』各年度版。

⁴ 厚生労働省『平成26年国民生活基礎調査の概況』10ページ。<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/dl/16.pdf>

いたが、2015年は30%に半減した。逆に、5万円未満は、7%から15%に倍増している⁵。そこで、いまや日本の大学生の2人に1人以上が、奨学金という借金をして大学に通わなければならない状況になっている。不安定雇用と低賃金の時代、大学卒業後の返済の負担は厳しさを増している。

高校生に対する求人数の減少、大学進学のために借金をせざるを得ない状況が広がる中、高校を卒業しても、その後の生活が成り立たない状況が深刻化してきた。小中学校と異なって、高校への進学は入学者選抜を経て行われる。その結果、高校の場合、学校によって生徒の学力が異なる。そして、入学しやすい高校ほど低所得家庭の子どもが多いことが明らかにされている。したがって、上述のような問題は、高校の中でも入学が比較的容易ないわゆる「課題集中校」の場合ほど深刻である。

貧困家庭の高校生は、卒業したら働いて収入を得て、自分の生活費を稼いだり、家庭にお金を入れたいと考えている。しかし、近年の高校卒業生が安定雇用、安定収入の職に就くことは困難である。

以上は、将来の卒業後の進路や生活をめぐる不安である。高校在学中も様々な困難を抱える高校生が増えている。生活のためのアルバイト、親のかわりの家事負担、家族関係などである。

一昔前、アルバイトを禁止している高校が少なくなかったこともあって、高校生のアルバイトへの注目が少なかった。しかし、近年の高校生は、スマホ代、部活の経費、通学のための定期代、ノートや文具、教材費や大学進学のための貯金など、自分自身のための費用をバイトでまかなうケールが増えている。さらに、家族の食費や光熱費などの生活費を稼がざるを得ない生徒がめずらしくなくなったと言われている。

1週間に何日もアルバイトをすれば、部活はできない。長時間のアルバイトは勉学に支障がでてくる。授業中に寝てしまう、試験期間中もバイトを休めないの試験勉強ができない。「課題集中校」には、所得の少ない家庭の子どもが多いので、アルバイトをしている生徒の比率も高い。ただし、「課題集中校」の場合、高校名を理由にアルバイトとして採用されにくいケースもある。

保護者の労働環境も厳しさを増している。早朝・夜間・深夜労働や、低賃金のため長時間労働を強いられる場合は、親子で食事を共にしたり、親子の会話の時間が取りにくい。子どもが親にかわって家事を引き受けなければならない。炊事、洗濯、掃除のほか、弟・妹の世話、さらに祖父母を介護しているケースもある。親子間の会話や団欒の時間は少ない。親も子どもも疲労しながらも仕事に追われるので、心理的余裕も乏しくなる。

一人親家庭の貧困率が高いことも知られている。18歳未満の子どもを持つ母子世帯は1994年に48万3千世帯、父子世帯は8万4千世帯であったが、2012年には母子世帯は82万1千、父子世帯は9万1千世帯に増えている。一人親世帯になった理由を見ると、死別によるものは少なく、2012年の場合、離婚または未婚を合わせると母子世帯の88.6%、父子世帯の75.5%にのぼる⁶。

⁵ 全国大学生生活協同組合連合会『第52回学生生活実態調査の概要報告』<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

⁶ 厚生労働省『ひとり親家庭等の現状について』平成27年4月20日。

子どもの面倒を見る必要があるうえ、そもそも女性は正規社員に採用されにくく、低賃金の不安定雇用となるため、母子家庭の半数が相対的貧困にあることはよく知られている。そのため、子どもが家庭で一人で過ごす時間が長くなるのは、既述の通りである。

親が再婚した場合、継父や継母との関係をうまく結べないケースがある。再婚ではなく、親の恋人が家にいるという場合もある。兄弟姉妹でも、父または母が異なる場合もある。このような事情で、家庭に居づらくなる子どもがいる。

困難の解決は教師では限界

以上に見てきた今日の高校生が抱える困難に対して、高校教員にできることには限りがある。かつては、生徒を何とか卒業させれば、定職について生活保護から脱却させられた。しかし今は、正規採用の求人が少なく、多くが低賃金で不安定雇用である。正規採用でもかつてのような昇給は期待できない。高卒の非正規雇用は多くが最低賃金レベルで、毎日まじめに働いても生活保護水準とそれほど変わらない収入しか得ることができない。非正規雇用で努力しても、正規雇用に転換することは難しい。そして、賞与はなく、定期昇給もなく、住宅手当も扶養手当もない。年金と健康保険は少ない収入の中から自分で納めなければならない。何年働いても豊かな生活を得ることは難しい。

文科省は学校におけるキャリア教育の推進を唱えているが、キャリア教育では根本的な解決にはならない⁷。高校卒業者の就職難の根本原因は、教育問題ではなく雇用問題だからである。

就労問題にとどまらない。虐待を受けて育った生徒、実の親でない保護者と暮らしている生徒など、生徒の抱える様々な困難に教師が対応することには限界がある。生活保護家庭の生徒の進学相談、保護者が精神疾患を持つ家庭の生徒への支援、借金の返済に追われる家庭の子どもの相談なども、対応できる教師は例外であろう。

高校生の困難は年ごとに深まっている。困難を抱える高校生に対する支援には、教員以外の人材の手が必要である。高校「居場所カフェ」は、若者支援の経験を持つ非営利団体が運営している点に大きな特長がある。

本報告書の概要

本報告書の編集者の高橋は、2012年から横浜市立大学こども若者の居場所研究会を、2～3か月ごとに開催してきた。子どもや若者に関わっている民間団体のスタッフを招いてその取り組みを報告してもらい、参加者が共有する会合である。この研究会をとおして、子どもの貧困と若者の就労が特に重要な問題であることが浮き彫りとなった。

ところで、横浜市立大学は公立大学として地域に貢献するため、様々の「地域貢献活動支援事業」を展開している。平成26年度は数ある「地域貢献活動支援事業」の一つとして、神奈川県立田奈高校の「バイターン」の検討を行った。「バイターン」は、アルバイトさえできない生徒にアルバイト体験を支援して、進路未定で卒業してもひき

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf>

⁷ 今野晴貴『ブラック企業』（新書）文藝春秋社、2012年、224～225ページ・

こもりにまらないようにするものである。平成 27 年度は、田奈高校の「ぴっかりカフェ」について考察した。ほかに、横浜市の生活困窮家庭の子どもへの学習支援事業についても検討して、報告書を作成した⁸。この報告書には、田奈高校の中野和巳校長、同校総括教諭・キャリア支援センター事務局長金澤信之教諭、同校学校司書で NPO 法人パノラマ理事の松田ユリ子さん、そして NPO 法人パノラマ代表理事の石井正宏さんにも原稿を依頼した。また、その間、大阪の西成高校で「となりカフェ」を運営しているドーナツトークの田中俊英さんを横浜市立大学こども若者の居場所研究会に招いて、大阪の事情をうかがった。

以上のような研究成果をふまえて、平成 28 年度は、3 部制定時制高校の横浜市立横浜総合高校で、横浜市立大学の地域貢献事業の一つとして、秋からカフェの開催にこぎ着けることができた。本報告書は、横浜総合高校校長の天野真人先生、進路指導部主任の飯森収先生、そして、毎回カフェで生徒たちと接している公益財団法人「よこはまユース」の富岡克之さん、尾崎万里奈さん、NPO 法人「横浜メンタルサービスネットワーク」の鈴木弘美さん、NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ (ME-net) 事務局長高橋清樹さんに執筆していただいた。これまでの半年間の「ようこそカフェ」をめぐる取り組みを振り返り、それをふまえて、カフェの意義と課題、そして今後のあり方などについての考察である。

⁸ 『横浜市寄り添い型学習等支援の検討 ― 研究会での委託法人関係者意見とアンケートから ―』横浜市立大学こども若者の居場所研究会、2016年3月、『神奈川県立田奈高校での生徒支援の新たな取り組み ― 図書館でのカフェによる交流相談を中心に ―』横浜市立大学、2016年3月。

横浜総合高校における交流相談カフェ

横浜市立横浜総合高等学校長 天野 真人

横浜市立横浜総合高等学校の概要

本校は平成14年に開校し、今年15年目を迎えた学校で、学校名のとおり総合学科であると同時に、三部制、単位制という、計3つの特長を持った、全国的にも非常にユニークな学校である。平成25年8月に、横浜市中区伊勢佐木長者町から、現在の横浜市内南区大岡に移転してきた。住宅街に囲まれ、落ち着いた環境に恵まれている。

一人ひとりの生活スタイルに合わせて時間を有効に活用することができ、かつ、様々な科目の中から自分の興味・関心・進路に応じて科目選択できることを特長としている。在校生は1136名、常勤の教職員数は96名である。非常勤講師や事務職員、技術員も含むと、総勢140名の教職員が生徒を支えている。

学校は午前の部、午後の部、夜の部からなる3つの部で構成されていて、それぞれをⅠ部・Ⅱ部・Ⅲ部と呼んでいる。中学生はⅠ部・Ⅱ部・Ⅲ部、すなわち午前・午後・夜の部のいずれかをあらかじめ選んで受検し、合格するとそれぞれの部に所属することになる。

定時制である本校は、1授業時間45分、一日4時間の授業を受けて、4年間での卒業を目指すのが標準である。しかしながら、一日5時間以上の授業を受けることによって、3年間で卒業することも可能となっており、現にそのような生徒が多数在籍している。

生徒のバックグラウンドは多彩で、「いじめや不登校の経験がある生徒」や「集団に馴染むことが苦手な生徒」、「複雑な家庭環境や経済的な課題を抱え、就学が困難な生徒」も多数在籍している。

意欲を持って高校生活を送っている生徒が多くいる一方で、「卒業時の進路決定率が低い」、「中途退学者・転学者が多い」、「授業出席率・単位修得率が低い」といった課題もある。

これらを解決するため、本校の最重点目標を「キャリア教育の充実」としている。あらゆる教育活動において、「基本的な生活習慣の確立」、「基礎学力の向上」、「社会的・職業的自立に向けて必要となる力の育成」を強く意識しつつ、諸々の改革を進めた結果、様々な指標が、徐々にではあるが改善の兆しを見せている。

86名／1136名

平成24年度のこども青少年局の調査によれば、横浜市内の15～39歳の労働人口のうち、20人に一人が無業状態にある。また、6ヵ月以上自宅を出ていない、いわゆる「ひきこもり」状態の若者が、8000人以上市内に存在しているとのことである。

上記のような環境の中で、本校の生徒は、家庭環境の課題、経済的な課題、精神面での課題など、様々な困難を抱え、社会的に不利な立ち位置にあるケースが多く見られる。

また、小中学校時代にいじめや不登校を経験した生徒も数多く在籍している。このような生徒も引き続き広く受け入れ、近い将来、社会において自立するために必要不可欠な力を在学中に身に付けさせることが、横浜総合高等学校の最大の使命であり、存在意義でもある。

このような学校の姿勢が中学生、保護者、中学校教員にも広く認知されるようになり、ここ数年は、長期にわたって中学校に通えていなかった生徒（出席しなければならない日数の1/3以上を欠席した生徒）が数多く入学するようになってきている。平成28年4月時点では、このような生徒が86名在籍していた。また、1/3未満の欠席であるものの、これに準ずる生徒、すなわち不登校気味であった生徒も多数在籍している。

66% → 77%

この数字は、先に述べた長期にわたって中学校に通えていなかった生徒が、本校に入学後、再び登校を開始し、一定の単位を修得して、進級なり卒業なりを果たす割合を示している。校内では、通称「復活率」と称している。

平成26年度は66%の生徒が本校での復活を果たしており、平成27年度は77%に大幅に改善した。生徒の頑張りはもちろんであるが、プロ意識を高く保ち、粘り強く指導を行ってきた教職員の努力抜きには、この数字は成しえなかったものと考えている。今後、より100%に近づけるよう、更なる工夫を行っていきたいと考えている。

130名 → 95名

これは中途退学者の数である。平成26年度が130名であったのに対し、平成27年度は95名に大幅に減少した。その内訳も以前とは異なってきているようである。以前は、怠惰が目立ったが、ここ数年は、正規就労や家計を助けるためのアルバイトに専念せざるを得ないというケースが増えているようである。ともあれ、95名という数字は、依然として大きなものであるため、数年のうちに50名を切ることを目指したいと考えている。

67名 → 106名

卒業後、正社員として採用されることが決まった生徒の数である。平成27年度が67名であったのに対し、平成28年度は現時点で106名である。年度末までにはさらに増えるものと思われる。高校生の就職環境が改善していることが大きな理由ではあるが、本校の進路指導部や担任による、不断の努力が功を奏した結果でもある。

その一方で、就職がうまくいかず、悩みを抱える生徒も多い。このような生徒は、高校在学中に卒業後の支援機関と繋がっておくことが非常に重要であると考えている。

122人／1136名

年2～3回行われる生徒情報交換会の際に、配慮を要する生徒として、全職員で情報共有している生徒の数である。配慮を要する生徒は、年々増加する傾向にある。

900+500件

上記のような状況なので、生徒の「誰かに話を聞いて欲しい。誰かに相談したい。」というニーズは非常に高い。養護教諭による相談件数は、今年度900件を超える見込みである。また、週3日勤務しているスクールカウンセラーによる相談件数も、年間500件に迫る勢いである。しかもその内容が、年々深刻になってきているため、一件当たりの相談時間も長時間化している。

また、養護教諭やスクールカウンセラーと担任との間での情報共有に要する時間や、保護者がスクールカウンセラーとの面談を求めるケースも、増加の一途をたどっている。

相談需要の量と質の変化について

前述のとおり、養護教諭とスクールカウンセラーは、既に手一杯の状況にある。もちろん、養護教諭やスクールカウンセラー以外にも、学級担任、教科担当、進路指導部、生徒指導部、生徒会指導部、部活動顧問、図書館司書等による相談活動も日々活発に行われている。生徒の相談にのることは、生徒を育むうえで極めて重要な活動なので、各教員は必要な時間を捻出すべく最大限の努力を行っているが、絶対件数の増大に伴い、教材研究等の他の活動に支障を来すことも多くなってきている。

相談の潜在需要にも注目する必要がある。積極的に教員やスクールカウンセラーに相談に来られる生徒の陰で、相談はしたいのだが、なかなかその機会を捉えることができず、悶々としている生徒も多数いることは容易に想像できる。また、そもそも学校に來られていない生徒も多数在籍しており、これらの生徒へのアプローチは手つかずの状態であることは否めない。

相談内容についても、複雑化・困難化の傾向が一層強くなってきている。各教員はカウンセリング・スキルの向上に努めているが、そもそも専門家ではないため、対応に苦慮するケースも多く見受けられる。その都度、校内でケース会議を開いたり、関係諸機関や医療機関等と連携したり、横浜市教育委員会からの特別な支援を受けることで、何とか対応しているが、より身近なところで専門家の支援が得られれば、より早い判断と行動がとれるため、リスクを最小化できるはずである。

横浜市教育委員会はこのような実態をよく理解し、スクールカウンセラー時数の増加等、予算の許す限り、最大限かつ最優先での支援を施してくれている。しかしながら、鰻登りの相談需要に、現場が耐え切れなくなっているのが実情である。

相談カフェへの期待

相談需要の量と質の変化にどう対応するかという課題に対する答えの一つが、関連諸機関等、学校外の教育資源のお力を拝借した「相談カフェ」の設置である。以下のようなメリットがあると考えた。

- 生徒が気軽に相談できる場を校内に提供すれば、相談需要の量の部分について、多くを吸収できる。
- 相談需要の質の部分についても、経験豊富な相談の専門家が校内にいていただけるメリットは極めて大きい。家庭環境の課題、経済的な課題、精神面での課題など、様々な困難を抱えた生徒の悩みを上手に緩和し、必要な場合、タイムリーに他の機

関に繋ぐこともできる。

- 大学生等、身近な年長者がスタッフとしていれば、よりカジュアルな雰囲気での会話ができる。
- 飲食も可とすれば、なかなか相談の機会を捉えることができず、悶々としていた生徒も、気軽に立ち寄れる。
- 少し余裕ができた保健室では、養護教諭による手厚い対応を要する生徒に、より多くの時間を割けるはずである。
- 様々な社会資源との繋がりを高校在学中に持つておくことは、万が一中退した後や、進路未定のまま卒業した後の、未就労リスクをヘッジする観点からも有効である。
- 高校時代に保護者や教員以外の大人と接する機会を多く持つことは、社会的・職業的自立に向けて極めて重要な経験となる。

現時点の状況

平成 28 年 10 月から原則毎週水曜日に開催し、10 回目を数えたところであるが、相談カフェには毎回 200 人前後の生徒が立ち寄り、大いに賑わっている。生徒の評判も上々で、カフェを居場所とする生徒も見受けられる。

また、カフェを開催している時間帯は、保健室への来室者も大幅に減少しており、教職員の負担軽減の観点からも有益な取り組みとなっている。

複数の生徒から、「カフェができて本当にうれしい。ありがとう！」、「毎日やって欲しい！」、「来年も絶対に続けてね！」といった声を、私自身が直接受けている。喜ばしいことである。

今後の展望

次年度以降の継続開催のため、人物金の支援はもとより、地域の教育資源との繋がりを作るためのアイデアを、様々な方面からご教示願いたいと考えている。

高齢者や未就学児童、障がい者、地元企業、PTA 等との連携を図り、生徒、地域、関連諸機関、学校が相互に Win-Win となれる関係が構築できることを願ってやまない。相談カフェは、そのための無限の可能性を秘めていると確信している。



横浜総合高校における交流相談カフェと就職指導

横浜市立横浜総合高等学校主幹教諭 飯森 収

横浜総合高校の生徒たち

本校の生徒が最も口にする、または思っているであろう言葉は「めんどくさい」である。この言葉は、授業や集会への出席、課題の提出、科目の履修登録、そして掃除、あげくは就職活動など、学校生活のあらゆる場面で聞くことができる。こちらの感覚が麻痺してしまうほど頻繁に耳にするし、態度や行動で感じ取れる。そこには最低限のがんばりや、最後の踏ん張りの崖っぷち感もなく、たとえばあと1時間欠席すると未履修となって単位が取れない、卒業できないという状況も気をもむのは担任や教科担当ばかり。あっけなく期待を裏切るのである。「ハー」とつくため息にのせる言葉は見当たらない。このむなしい現実の積み重ねが横総の日常である。だから、進路指導部に出入りする様々な外部の関係者が「横浜総合よくなりましたね、みなさんあいさつしてくれます」は、ありがたいが胸が痛い。この後ろ向きの意識を180°転換させる教育活動を展開しなければこの学校に本当の未来はない、と私は思っている。

いきなり悲観的な現実を書いてしまったが、交流カフェの順調な立ち上げに、実はこの視点を無視しての工夫はまったくの的外れであるからだ。簡単に言うと、学校ってところは面白いところだと思える、根拠や場やきっかけを提供することがとりあえずの最善の策である、となる。人間面白いと興味が持て、継続して参加したり、やっているうちに何か前の自分とは違う自分になんとか気づく。本当の勝負はここからなのだが、その入り口として「交流カフェ」は万能薬になる可能性を秘めている。他人との接触が苦手、一人が好き、会話ができない、会話のネタにも乏しい、未来図が描けていないので将来も語れない、今やるべきことを考えるだけでもめんどくさい等々。だが悩みはある。ひとりぼっちは少し淋しい、友達がいる人はなんとなくうらやましい、バイトもやっていないから暇なんだけど特にやることもない、家に帰っても一人でおもしろくない、親とも折り合いが悪いからすぐに家に帰りたくない等々。一見楽しそうに友達面していても、校門を出たら一切交流がない生徒も多数存在する。

「交流カフェ」の魅力

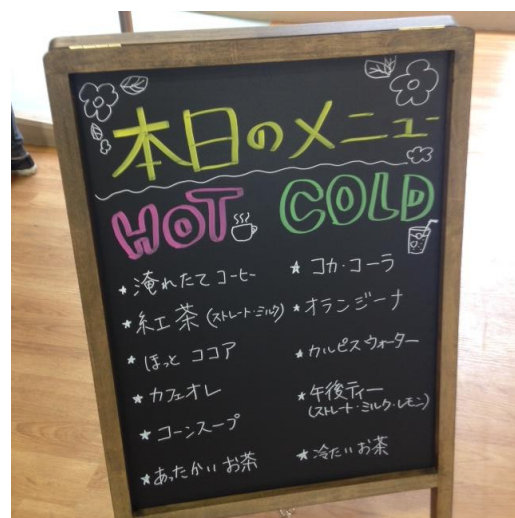
一昨年までは、「自立支援」の名の下、高卒を迎えてもその先の見通しが立たない生徒を中心に、社会に出る準備段階の受け皿として、あるNPO法人に協力をいただき、生徒の相談活動を受けていた。この欠点は両者の顔合わせまでに時間がかかることである。時には人を何人も介さなければ実現できない場合もある。もちろん生徒のドタキャンもある。遅々として成果はあがらなかった。一方で、本校に入学してくるさまざまな課題を抱えた生徒の日常が高校入学と共に劇的に変わることもなく、千差万別の生徒の悩みは相変わらず出口をみつけれないまま、正体不明であり混沌として闇のまま。したがって生徒それぞれが進路決定に至る道筋は、表面的な進路指導ではもはや限界に来ていた。「場」を提供するにしても頻度、斬新さ、気楽さ、お得感といった要素が含まれて

いないと生徒の反応は薄いことは目に見えている。気安く、思いついたときに、自由な雰囲気、飲み物や口にできるお菓子があって、なんか楽しそう、おしつけがましくないし。

想像以上の人だかりに戸惑う暇もなく、「先生何か飲んでかない？」今やスタッフさんに紛れて得意げな常連もできた。毎回新しい顔を見ることができるのは、この企画が正解だった証と言える。友達と来ても、一人で立ち寄っても、名前も知らない者どうしでお茶しながら話す、大学生のボランティアに先週の続きの話をしに来る。無条件の受け入れの雰囲気が初回から醸し出されたのは、ひとえに運営に携わっていただいているよこはまユースさんはじめ、お力をいただいている NPO 法人各団体のスタッフさんの人柄であり、長年の経験値であり、若い大学生の熱い思いであり、支えてくださる皆さまの気遣い心遣いによるところが大きい。滑り出しが順調であるだけに、単なる飲み食い、談笑の場でとどめておくのはもったいない。進路決定の障害となる芽を早い段階でくみとり、高校卒業を目指す意志や環境を継続させ、希望の進路へ一歩足を踏み出す勇気を、何気ない出会いやきっかけから生徒自身がかみることができれば、さらに「交流カフェ」の魅力は増していく。

就職への効果

私は、本校生徒は基本的に高卒と同時に社会に出てほしいと考えている。もちろん明確な目標があれば進学も当然ありなのだが、果たして進学することが社会に適応する最終手段、もっと言えば幸せへの近道となり得るのかについては疑問が大きい。就職であれば、適性以上にコミュニケーション力が求められる。進学する場合でも、コミュニケーション力は重要視される。この力が未熟な生徒が多い本校には、「交流カフェ」は最も効果的なアプローチであると、ほぼ確信をもって今は言える。フリースペースで生き生きとした生徒の顔を見ていると、ここにはまだ顔をだせていない生徒も含めて、卒業するすべての生徒が「横総でよかった」、と思える環境づくりを、日々惜しまず工夫する努力と覚悟が大人の側に求められているのだと痛感する。



交流相談カフェを通じた「居場所づくり」 —横浜総合高校「ようこそカフェ」の取組—

公益財団法人よこはまユース 尾崎 万里奈

「ようこそカフェ」は、平成28年10月に横浜市立横浜総合高校（以下、「横浜総合」という。）のフリースペースでオープンした“交流相談カフェ”である。神奈川県立田奈高校「びっくりカフェ」や川崎市立川崎高校定時制「ぼちっとカフェ」をモデルとして、平成27年から高校や関係機関との協議をはじめ、翌年10月に横浜市立高校で最初の高校内カフェとしてスタートした。「ようこそカフェ」の運営を通して見えてきた生徒たちの姿やカフェの様子から、交流相談カフェがもつ「居場所」としての可能性について考える。

1. 「ようこそカフェ」の様子



横浜総合高校の「ようこそカフェ」は、だいたい毎週水曜日、お昼の12時から夕方17時半まで、1階のフリースペースでオープンしている“交流相談カフェ”である。ジュースやお茶、お菓子を無料で提供するカフェ形式の交流・相談の場として、青少年育成や若者支援に関わる団体のスタッフが中心となって、大学生・社会人のボランティアとともに運営している。

カフェのお客さんは横浜総合に通う生徒たちで、毎回およそ200人がカフェに立ち寄ってくれている。12時のオープンに向けてカフェの準備をしていると、11時30分頃にはテーブルが生徒たちで一杯になってしまうことも多く、1部の授業が終わる12時5分を過ぎにはカウンターの前行列ができて、スタッフがうれしい悲鳴をあげることもし

ばしばだ。

利用方法は簡単で、まず生徒たちにカウンターに置いてある受付表へ、名前や入学年度を書いてもらい、「何にする？」とスタッフが声をかける。カフェがオープンした10月はまだ暑い日もあってコーラやCCレモンなど冷たい飲み物が人気だったが、12月に入るとホットココアやカフェラテ、コーンスープなど温かい飲み物を頼む生徒が増えるようになってきた。「ココアにしようかな〜?」、「春雨スープください!」という生徒たちの声に応じて、スタッフがカップに名前を書いて飲み物を手渡し、「お菓子もあるよ〜」と声をかける。並んでいるのはカントリーマアムやホームパイなど定番で、人気のお菓子はあつという間にお皿から消えてしまう。

カフェでの過ごし方は十人十色だ。カウンターで受け取った飲み物やお菓子を手に、友人同士で過ごす生徒も居れば、スタッフとの他愛もないおしゃべりに加わる子、スタッフや他の生徒たちに声をかけてトランプやボードゲームを始める子、大学生スタッフを捕まえて宿題を見てもらう子など、みんながそれぞれの過ごし方で同じ時間と空間を共有しているのが「ようこそカフェ」のいつもの風景になっている。

「ようこそカフェ」のコンセプトは、誰でも好きな形で参加できる「みんなの居場所」であり、ちょっとしたグチや悩みを聞いてくれる人がいる「相談の場」だ。生徒なら誰でも利用できる校内のフリースペースに、飲み物やお菓子といった万人共通のツールと、生徒たちの話に耳を傾け、興味をもって向き合ってくれる大人が加わったカフェは、少しずつ「居場所」として学校に定着しはじめている。



2. 「ようこそカフェ」から見る「横浜総合高校」

授業が終わったⅠ部生がほっと一息いれている隣で、これから授業がはじまるⅡ部生は飲み物を受け取り、ポケットにそっとお菓子をしまっただけのまま教室に向かう。ギリギリまでカフェで粘って、授業開始直前に慌てて走っていく生徒の姿もある。なかには、行きたくない理由をこれでもかと並べたてているうちに、授業が始まってしまう生徒もいる。

横浜総合でカフェをスタートしてまず驚いたのが、生徒に求められる自主性・自律性の水準の高さだ。「3部制」「単位制」「総合学科」という3つの特長をもつ横浜総合では、Ⅰ部・Ⅱ部・Ⅲ部で授業の時間帯が違うだけでなく、生徒たちはひとりひとりが異なるスケジュールで行動している。クラスや学年、学校全体で行動を共にする機会は限られており、自分自身の行動を律する力が求められる。

また、科目によって一緒に授業を受けるメンバーも違うため、同じ入学年度でもお互いの名前や顔をよく知らないという生徒も多い。「自分のクラス」といった固定した人間関係がないため、生徒同士のつながりがそれほど密ではないということも、カフェを

通して見えてきたことのひとつだ。うまく友人関係がつかれず、学校に居場所を見つげられていない生徒とカフェで出会うことも少なくない。



クラス内での固定した人間関係に縛られないというメリットはあるものの、コミュニケーションを不得手とする生徒にとっては、自分の力で人間関係を広げていくことの難しさを感じる環境であるとも言える。

さらに、学年制の高校と比べると教員と生徒の接点が限られており、1000名を超える在籍生徒ひとり一人の状況や背景を学校が把握するということの難しさもある。中退や進路未定という不安定な形で社会に出ることになる生徒を減らすためには、これらのリスクを抱える生徒の課題を、いかに早く発見・支援できるか、という高校内での相談支援機能がカギとなる。教職員がキャッチした気になる生徒の情報を外部の支援機関につなぐことに加えて、カフェのような交流の場での雑談やちょっとした悩み相談を通して、早い段階でリスクを抱える生徒を発見するという交流相談の機能は、横浜総合のような定時制・単位制の高校では特に有効なのかもしれない。

このように、高校内カフェというアプローチを通して、青少年育成／若者支援団体のスタッフや大学生、社会人のボランティアをはじめとした様々な立場の大人が、高校内で生徒と接する機会が生まれたことで、学校の「外側」からは見えにくい高校生たちの現状や課題に「学校外部」の人びとが気づき、その支援のために行動を起こすきっかけになっていると言えるだろう。

3. 「ようこそカフェ」のオープンに向けて

カフェのオープン前は、「誰も来てくれなかったらどうしよう…」と不安な気持ちで一杯だったが、フタを開けてみると、本当にたくさんの生徒が立ち寄ってくれるようになり、当初想定していなかったような隠れたニーズも見えてきている。毎回200人という結果が、十分な成果と言えるのかは今後の検証を待つ必要があるものの、高校にとっても、私たち運営団体にとっても、想像以上の結果であることは間違いない。

横浜総合でカフェを実施することが決まり、実際にオープンするまでの約半年間は、高校と運営団体間で何度も打ち合わせを行い、教職員会議での説明や生徒向けWS（ワークショップ）の実施、終業式での全校向け周知など、できるかぎり沢山の生徒にカフェを知ってもらい、足を運んでもらうための準備を重ねてきた。

運営団体のひとつであるNPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ（以下、「ME-net」という。）の発案で行った生徒向けWSでは、「次年度卒業しないことが決まっている生徒」を対象に、コミュニケーションを深め、キャリアについて考えるワークを行った。カフェのスタッフがWSの進行係として参加することで、事前に生徒とスタッフの顔合わせの機会を持てたこと、そして、WSの中でカフェのメニューや名前について生徒から要望を聞く機会をもてたことは、初回から多くの生徒がカフェに立ち寄る状況とその後の参加しやすさを生み出すポイントになった。

また、学校の全面的な協力により、教職員会議でカフェの周知をさせてもらったことの意義も大きい。はたから見てみると生徒と教員の関係は不思議なもので、話を聞いていないような生徒でも、教員の考えや姿勢に大きな影響を受けているように思える。カフェへの参加を促す声かけはもちろん、教員がウエルカムな姿勢をもってカフェに関わってくれたことが、「ようこそカフェ」が盛況となった大きな要因だと考えている。



そういった意味では、「ようこそカフェ」の実現に向けて、高校内での受入体制を整え、合意形成に力を尽くしてくださった校長先生や進路指導部の先生方のご助力こそが、高校内での”交流相談カフェ”立ち上げにおいては最も重要なポイントだと言える。そして、高校からの全面的な協力を得ることができた背景には、ME-netやNPO法人横浜メンタルサービスネットワーク（以下、「YMSN」という。）という多様な支援団体との連携と、横浜市立大学の高橋寛人教授という学識者による後押しに依るところが大きい。

4. 「なんてことないおしゃべりができる場所」を目指して

2016年10月5日、まだ名前も決まっていないカフェがフリースペースでオープンした。呼び込みのために、「フリースペースでカフェはじめます！」と書かれた小さなチラシを準備したが、初日からたくさんの生徒でにぎわい、その日チラシが配られることはなかった。

無料のカフェ形式で交流相談の場をつくる、という取り組みに「支援っぽさ」という“押しつけがましさ”を感じ取ってしまえば、生徒たちは立ち寄らなくなってしまう。



「あそこに行くとなんか楽しい・居心地がよい」と思ってもらえるような場づくりに、まず力を入れて取り組んできた。

実際にカフェに来てくれる生徒に「カフェができた感想は？」と聞いたところ、

「カフェができてよかった」

「実家よりも安心する」

「カフェで話ができて発散になる」

「考え方が違う人に出会えた」

「カフェは居心地が良い。家に帰りたくない」

といった声を聞くことができた。もちろん、顔見知りのスタッフに直接聞かれている場面で、スタッフを喜ばせようという意識も働いているだろうが、「話ができて発散になる」、「考え方が違う人に出会えた」といった感想は、スタッフと生徒の関わりを実際に見ていても大きく頷く部分である。午前中で授業が終わるI部生の中には、12時のオープンから17時30分のクローズ近くまでカフェでスタッフや他の生徒とおしゃべりしたり、トランプやUNO、オセロなどのゲームをしたり、時々授業の課題をやったりしながら、長時間滞在する生徒も少なくない。仲良くなった大学生スタッフと長いあいだ話し込んでいる姿は、「ようこそカフェ」ではお馴染みの風景だ。

そして、そんなおしゃべりの中には、「学校で話せる相手がいない」、「授業が終わってから夕方アルバイトまで居場所がない」といった居場所や交流の場を求める声の他にも、「家族との折り合いが悪く、家に帰りたくない」、「家では家事を一手に引き受けており、落ち着ける場所がない」、「早く家出したい」など、個別の相談支援が必要と思われる声もまぎれている。実際に個別相談で対応した中には、養育環境に課題があり、家出をした状態で高校にはなんとか通っていたという生徒もいて、高校という場所がその生徒と支援機関をつなぐ唯一の接点になっていたというケースもあった。

毎回のカフェ終了後には、スタッフで振り返りのミーティングを行う。今日気になったことや生徒の様子をスタッフ間で共有して、スタッフが個人的に抱え込まないようにすると同時に、特に気になる様子の生徒の情報は、担当の先生とも共有する。初期のミーティングでスタッフが発した「とにかく話を聞いてほしい子がたくさんいる」という感想には、スタッフ全員が深く頷いていた。

カフェでの生徒の関わりを通して強く感じていることは、なによりもまず、生徒にとって「居場所」となる場所が必要であり、そこでの交流から生まれてくる雑談の中にある「相談未満」のグチや悩みを聞くことの大切さである。生徒たちが切実に求めている

のは、個室に区切られた「相談の場」ではなく、「なんてことないおしゃべりができる場所」なのだ。相談支援の対象は、支援ニーズを抱えている人だが、実際には自分自身の支援ニーズを自覚している人は少ない。「いま、自分が困っていることは、自分ひとりの力では解決できないかもしれない」という支援ニーズの“自覚“を引き出すという意味も含めて、できるだけ多くの生徒たちの相談未満のグチや悩みを聞きとることができる場が必要であり、「ようこそカフェ」に生徒が来てくれるのは、そんな「なんてことないおしゃべりができる」というニーズに応える場所だからなのかもしれない。



5. 「ようこそカフェ」の未来

カフェがオープンして初めての年末を迎えた12月21日、教育委員会や区役所、社会福祉協議会など関係機関に呼びかけ、「ようこそカフェ見学会」を実施した。見学会には報道関係者も参加して、後日「ようこそカフェ」の取り組みが『生徒の悩み相談カフェ』として新聞紙面上で紹介された。反響は大きく、有難いことにボランティアとして協力を申し出てくださる方もいた。

県立田奈高校の「ぴっかりカフェ」などの先行事例をモデルに、横浜総合高校や協力団体と共に手さぐりでつくりあげてきた「ようこそカフェ」は、想像以上の手応えを得て、まず初年度の運営を終えることができた。楽しいことも大変なことも気楽に話せる場所、困った時には誰かに話してみようと思ってもらえるような場所を目指して、「交流の場」・「居場所」・「身近な相談の場」をコンセプトに運営に取り組んできた。

今後の課題のひとつが生徒たちの「食」の問題である。生徒の中には、カフェで提供している春雨スープやお菓子を昼食代わりに空腹を満たしている生徒や、何度も「おかわり」をする生徒も多い。中には、様々な事情から家庭で十分な食事ができていないように見える生徒もいる。いまのところカフェでは「お菓子は1回1個ずつ」というルールで、実質的におかわりOKの仕組みになっていることもあり、「何度もおかわりする子」＝「食事面など生活が心配な子」として、スタッフが気を配るきっかけにもなっている。中退や進路未定での卒業というリスクの背景には、少なからず生徒の家庭環境や生活面の課題が見え隠れしている。「子ども食堂」といった取り組みにも大きな注目が集まる中、カフェの延長線上として生徒たちの「食」の支援も少しずつ形にしていきたいと考えている。

もうひとつが、地域とのつながりの強化である。カフェでお菓子や飲み物を無料で提

供していることに対して、「どこからお金が出ているの？もうけはあるの？」といった至極当然の疑問を投げかけてくる生徒もいて、「横浜市立大学からの助成や色々な人の寄付で成り立っているんだよ」という話をすると、「ふーん」といった顔をして聞いている。今後は、生徒にとってより身近な人や団体、具体的に顔の思い浮かぶ人たちによって支えられ、見守られていることを感じてもらえるような場になるように、カフェを受け皿とした地域連携を進めていきたい。

最後に、カフェの感想を求められて「実家よりも安心する」と言ってくれた生徒は、今年、卒業して社会の一員として巣立っていく。「来年はスタッフとして手伝いに来てね！」とスタッフ皆で口々に声をかけて、今年度最後の「ようこそカフェ」は閉店した。4月からは、彼ら卒業生もカフェを支えるスタッフの一員として、あるいは、仕事や学校の合間にほっと一息つける場所として、カフェに顔を出してくれることを願っているし、またカフェで「ようこそ」と迎えてあげられるように、カフェを続けていきたいと思う。

校内カフェを通して見えること

公益財団法人よこはまユース 富岡 克之

① - 学校内に居場所がある意味 -

私たち法人は、これまで地域の青少年の居場所づくりに取り組んできた。地域にある居場所機能を持った場につながる（つながれる）青少年は、その場の周辺に在住在学の青少年か、音楽やダンスの練習など目的を持って来る青少年が大半であり、居場所につながる青少年は限られている。また、居場所を見つけられても、交通費がかかったり、場になじむための努力(スタッフとの関係づくり等)が必要だったり、何よりも場に踏み込むための勇気が必要となる。

その点、学校という普段行きなれた場、生活しなれた場といった日常生活の過程に居場所があることで、より多くの生徒が気兼ねなく立ち寄ることができる。さらに学校内では生徒が「主役」であり、支援者は外部の「お客」という立場なので、心理的な面においても生徒が参加しやすい雰囲気生まれている気がする。

また、カフェを実施している場所も、正面玄関と教室を結ぶ廊下の途中にある「オープンスペース」という日頃から生徒や先生が行きかう場所に存在しているのも、生徒の参加率を高めている。わざわざ足を運ぶ場でもなく、カフェがない日でも自由に使える馴染みの場所なので、授業の前や、帰宅途中に気軽に寄れる場となっている。そのため、のんびりと終始カフェにいる生徒や、立ち食いソバ屋のようにサッとドリンクとお菓子を頼張り教室に走り去っていく生徒など参加形態は様々である。どのような参加形態でも、カフェに顔を出し繋がることに意味があると感じている。はじめは一瞬で去っていった生徒も、一瞬が一分になり、一分が十分になって、今ではカウンターでお茶をサーバーボランティアまで行う常連になっている。このような関係性の築き方ができるのも、学校内という身近でオープンな場に居場所が存在する利点である。



② - 安心できる場があるということ -

これまでカフェを通して生徒と関わり話をする中で、一番多く聞かれる言葉は「唯一カフェが安心できる時間だ」ということだ。安心できる場をつくる意味を生徒との会話から考えてみたい。

＜ある日の会話から①＞

ある女子生徒は、アルバイトを週6日している。カフェがある水曜日は、アルバイトを休みにして放課後に参加してくれている。学校に通うための交通費、学費を稼ぐために、学校が休みの日には、アルバイトを掛け持ちし1日フルで働いている。そのため、休まず授業に出席するのも大変だが、何よりも友だちや家族とゆっくり話したり、のんびり過ごすための自分の時間が持てていないことに疲れを感じていたようだ。カフェが出来てからは、クラスメイトやスタッフとゆっくり過ごす場ができ、更に無料であることも感謝されている。

＜ある日の会話から②＞

ある男子生徒は、兄弟が多くいる。そのため長男である彼は、授業が終わり家に帰ると、弟たちのために夕食づくりや洗濯、お風呂の準備など一人で家事を担っているそうだ。そのため、家では自分の時間が持てず自分のやりたいこともできない状況だという。カフェにいる時間は、家に帰るまでの自分のために使える貴重な時間となっている。また、カフェのスタッフに家事の大変さを理解してもらったり、「偉いね」と言ってもらうことが、意欲に繋がっているとのこと。

＜ある日の会話から③＞

SNSを通して友人関係を築く現在の高校生にとって、SNSのトラブルの話をよく聞く。受験時に「受験した人」のLINEグループができ、不合格者は淘汰され「合格した人」のグループができ、LINEで顔写真を交換するなどして入学前からSNS上で仲間づくりが始まっているとのこと。そのため、入学後に多くのグループに所属している女子生徒は、方々でいい顔をしたり、付き合いがあったり、リアルな繋がりになると苦勞が絶えないという。また、LINEでの発言が誤解を生み、関係を修復するための相談や、グループをうまく抜けるための相談などSNS上では相談しにくいことを、スタッフに打ち明けてくれる。



このように、生徒たちと関わっていると、周囲には話を聞いてくれる人、見受け入れてくれる人、認めてくれる人が少ないことが分かる。このカフェは、生徒一人ひとりが背負っている不安や不満、苦勞などの重荷を週に1度降ろし、心を休ませる機会となっている。また、話す相手も家族や先生では

なく、何の利害関係もない地域の大人（第三者）であることが生徒にとって胸の内を打ち明けるための心の壁を下げているのだろう。

緊急性の高い相談は殆どないが、安心できる場が身近にあり心の内を気軽に話せる場があるということで、深刻な状況に陥る前の予防的な役割を果たしているのだと感じる。

③ - スタッフとしての楽しみ -

私事ではありますが、私はカフェに行くのを毎回楽しみにしている。それが何故なのかを振り返ってみると、いくつかポイントが見えてくる。

<一つ目のポイント>

カフェのスタッフということだけで、生徒からとても感謝される。さらに、一緒にお茶を飲み、話を聞くだけで信頼を得られる。手作りのスープを出せば「おいしい」「また飲みたい」などと褒められる。など、カフェに参加することで私自身必要とされること、生徒に受け入れられていることを実感する。

<二つ目のポイント>

多様なスタッフやボランティアと繋がるのが楽しい。学生スタッフやNPO職員、専門支援員、校長先生や教職員の方々といった多世代で多様な人と関わり価値観に触れられることで、毎回新しい発見や視点を得られ、自身のブラッシュアップに繋がっていること。

<三つ目のポイント>

学校側の受入体制（対応）に壁を感じないこと。学校の仕事を増やしている取り組みにも関わらず、事務職員から教職員まで学校全体が協力的かつカフェに対して感謝をいただいている点である。そのため学校に行きやすい雰囲気が常にあり、気兼ねなく安心して学校に行くことができる。

<四つ目のポイント>

週に一回の短い関りだが、回を重ねるごとに生徒たちの変化や育ちが見て取ることができる。このように生徒たちの育ちの中に共にいられることを実感できることに何よりの喜びを感じる。

このように、スタッフ側にも多くの楽しみをカフェでは感じることで、この楽しみが次へ参加意欲に繋がっているのだと思う。そして、生徒たちと同じようにカフェの楽しさを感じ得ることで、生徒に対しても「ようこそ」というウェルカムな雰囲気を生みだしているのだと思う。



④ - 多様性を生む場づくり -

このカフェの運営は、我々よこはまユースをはじめ、多文化共生教育ネッ

トワークかながわ、横浜メンタルサービスネットワーク、横浜市立横浜総合高校、横浜市立大学といった様々な団体が連携して実施されている。そのため、居場所づくり、キャリア支援、心の相談、進路指導、成果の検証といった各々が専門的な活動を展開することで幅広い受け皿を用意することができている。また、各団体が繋がっている機関や団体も様々で、行政関係から企業までの協力体制の広がりも見えてきている。実際に、近隣の弘明寺商店街の商店会役員がカフェの視察を機に協力体制が構築されたり、地元の南央ロータリークラブにおいては、会員である各経営者がカフェのスタッフとして参加し、生徒たちに直接就労相談や働き方や職選びの助言を行うなどの展開も生まれている。

このように、ゼロから作り上げるのではなく、地域資源をうまく活用(結びつける)していくことで、カフェを入口に生徒たちを社会とつなげる道筋を多数生み出していけると感じている。カフェという場ができたことで、生徒だけでなく支援団体をはじめ企業や地域が学校と繋がるキッカケとなり、多様な支援の可能性が生まれてきている。

⑤ - 居場所づくりから次のステップへ -

横浜総合高校には、ホームルームはあるがクラス単位で活動する機会が少なく、ルームメイトも作りにくいという。カフェが出来たことで、生徒たちは新しい友達や先輩・後輩と繋がることができ、交友関係の広がりを見せている。その背景には、学生スタッフは、トランプやUNOを使って一人で来ている生徒やあえて学年が違う生徒をメンバーに引き込むなど、生徒同士がつながる仕掛けを施している。カフェには様々な見えない工夫がたくさんあり、参加する生徒は「自分の力で仲間をつくることができた」「人と関わることは楽しい」「やってみたら意外と面白かった」「また同じ仲間でもトランプしたい」など社会という集団の中に自然と一歩踏み出している。

そして、このカフェで育まれるほんの少しの心の成長を活かすためにも、地域社会に結び付けていくのが、次のステップであると考えている。学校という生徒にとって身近な場にある居場所が、学校から社会に踏み出すステップとなり、生徒自身がそれぞれの居場所を地域社会に増やしていけるような

役割を果たせるカフェにしていきたい。



困難を抱える高校生のメンタルヘルス

～横浜総合高校「ようこそカフェ」での相談機能を通して～

横浜メンタルサービスネットワーク理事 鈴木弘美

はじめに

今年度、筆者は横浜総合高校における交流相談カフェ（以下「カフェ」と略す）で、「高校生のメンタル相談」の機能を果たすために参加した。来年度に向けて、今年度の経験を踏まえて印象や課題を述べたい。

1. 高校生たちのつぶやき

カフェの大半は彼らとの会話によって成り立ち、会話によって高校生の生活を知ることとなる。「これからバイトです」「部活の休憩時間なんだ」「帰ったら、小さい弟の面倒見なくちゃならない…ここで癒されてから帰ることにする」「母がいるんだけど、仕事で忙しいから保育園の迎えに行かなくちゃ」「年齢が合わなくて、話をする相手がいなかった」「バイトのお金はイベントで全部使うんだ」「3年生だけど、もう一年在籍しようか迷っている」「就職決まった」「彼と別れた…」「ネットで知り合った友だちと連絡取れなくなって、心配…」「プレゼン、自分のグループは見学者が少なかった」「大学に合格した」「大学の面接なんだけど…」「今日は朝から何も食べてない」「今日初めての固形物だ～」などなど

実際高校生たちのつぶやきから見える日常は多彩で、言葉は悪いが意外と健康的な内容が多かった。まとめてみるとここに集まる高校生たちは、①家族のこと、②学業のこと、③友人関係のこと、④進路のこと この4つに関するつぶやきが多い。これらは、文部科学省が行っている「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」で言われている高校生の長期欠席や中退の状況の内容分析とも合致する。健康的な内容であるからと安心はできない。つまりこれらのつぶやきをどこで吐きだし、どうやって自分の中で解決していくかということが、高校生のメンタルヘルスの維持には重要である。

2. 吐きだす仕組みづくり

カフェは、高校生たちが集い、なんでも話し合える場を提供していると言える。とかく大人は「困ったら相談してね」とスペシャルな環境での相談をすることを求めがちである。しかし、本当は毎日感じていることを吐きだす場が必要なのではないか。

実際に面と向かったコミュニケーションというものが希薄になった現代において、改めて話すというのは非常に敷居が高い。カフェでは、その敷居を低くして、ふらっと立ち寄り、気軽に会話ができる空間に形作られている。例えば、1人で立ち寄りの子には、大学生スタッフが寄り添い、話を聞く。また、グループで集う子たちの中にはスタッフが参加し、話をきく。その中で様々なつぶやきが自然と吐き出されているのである。

また、輪の中で吐き出された気になるつぶやきをスタッフがシェアし、学校に返す仕組みも出来上がりつつある。

カフェの場に来て、誰かを相手にぼそっと外に吐き出すこと、それがメンタルヘルス活動につながる。実際高校生たちは、あの場でいろいろなことを吐きだただけで、自己治癒していく場合が多い。

3. 吐きだすことを拾う

吐きだした内容によっては、周りにいるものがわざわざ拾って、丁寧に扱う必要があるものもある。例えば、先のおつぶやきにあった「母がいるんだけど、仕事で忙しいから保育園の迎えに行かなくちゃ」。昭和の時代であれば年の離れた弟や妹の面倒を見るのは当たり前であるし、美談でもあった。

しかし、現代はコミュニティーが希薄になり、弟や妹の面倒を見ている高校生に「大変だね～」とねぎらったり、「ちょっと見てあげよ」と手を差し伸べたりする機能が低い。その中で高校生にかかる負担はかなり大きいはずだ。

実際、小さな弟・妹に合わせてアルバイトを入れ、学校の時間帯(定時制では夜間)を設定し、進路を選ぶにも夜間の専門学校を選択するという。母が日中仕事していることを配慮して、家族全体を調整すると高校生が夜間学習するという選択になっていく現実を知らされる。

そのようなつぶやきに、ファミリー・サポートなど利用するという機能を情報提供する。今後は、そのように拾う作業が必要になっていくのであろう。

カフェを見学に来た生活保護のケースワーカーは、保護世帯の親には会うが、子どもたちと接する機会がないと話す。高校に入学しても理由不明で中退してしまう子どもたちに話しかけることもできないのが現状だという。カフェの存在を知り、子どもの声を拾ってもらえる場があることに期待を寄せているという。

カフェでは、高校生の輪の中で吐き出された気になるつぶやきについて、片付け後、スタッフ間でシェアしている。家庭のこと、友だち関係のこと、学業、進路に関する話が話題に上る。気になる話題に関しては先生に返し、場合によってはフィードバックしてもらおう。その仕組みこそが生徒が伸び伸びとしつつも、見守られて成長していき、高校生のメンタルヘルスの維持につながるものである。

4. 潜在する要支援学生

本当に深刻な課題を抱えている学生たちは、なかなか課題をオープンにしていくことは、今後も難しいと予想される。

ある日、担任の先生からの相談で他のスタッフが中心になり対応したケースがある。本人の話聞き、状況を担任に伝え、対応策を考えた。カフェ機能の中ではやりきれない重い課題(各関係機関を巻き込まないと解決しない事項)であったのでスクールソーシャルワーカーにつなぐことを提案して、その日は終わった。

友だちもいるので学校に来ることが楽しみだと言う高校生。でも家は… 深刻な課題は、問題が大きくなって初めてそばにいる人がキャッチすることになる。そして問題が

大きくなった分、解決にも時間がかかってしまうのだ。

今後は、SNSの活用など高校生たちが気軽に吐き出す媒体を利用して、そういう子どもたちを、何とかカフェにつなげる努力が必要になるかもしれない。高校生たちにとっての深刻な問題がそれ以上大きくならないよう、また自分で解決できる治癒力を養っていくことができるような場としての機能も併せ持つことがカフェ運営の将来図であることが課題でもある。

おわりに

まだ6カ月弱の試みである。他のスタッフと試行錯誤しながら、前述してきた ①つぶやきを吐き出す ②吐き出す仕組み ③吐き出すことを拾う ところまで丁寧に関わっていきたいと思う。

※この原稿は、法人理事、田園調布学園大学准教授、舩松克代の協力を得て執筆しました。



定時制高校でのキャリア支援としての「校内居場所カフェ」を考える

NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ（ME-net）事務局長 高橋 清樹

1. 定時制高校の今

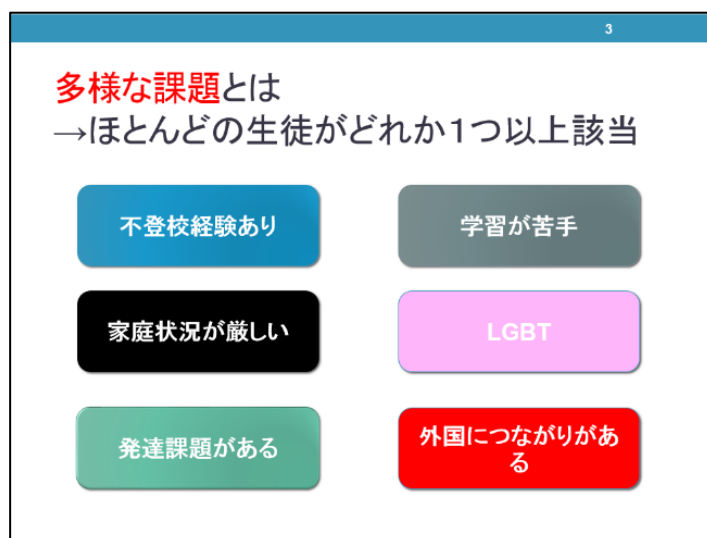
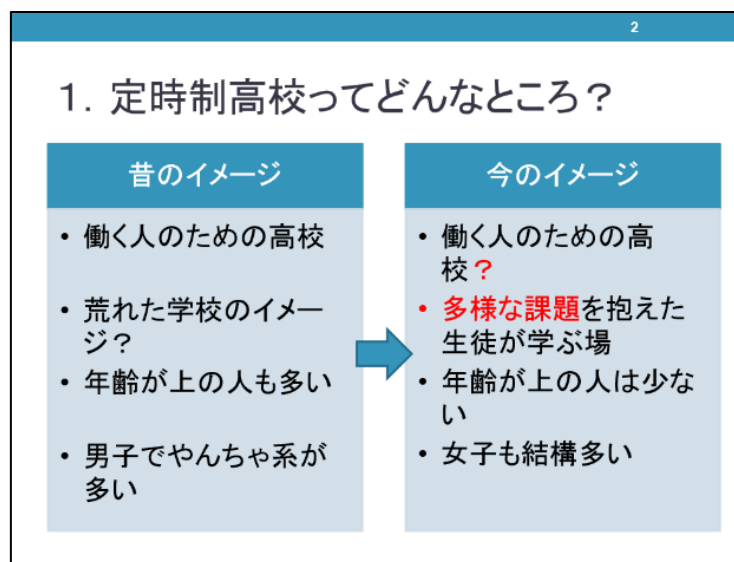
かつての定時制高校を知る人たちは、「働く人のための高校」「荒れた学校のイメージ」「年齢が高い人も多い」「男子でやんちゃ系が多い」といったイメージを持たれているのではないだろうか。

しかし、現在の定時制高校は、本来の「働く人のための高校」というイメージとは程遠い。

ある定時制高校の調査によれば、

在校生のうち、正規就労者は3%、無業者が43%、アルバイトが54%という状況である。また、多様な課題があり、「全日制に行きたかったが、行けなかった」という生徒が多数である。いわば、消極的な選択の中で定時制高校に通っているため、「自己肯定感」や「自信」が持てず、社会とのかかわりが少ない状況にある。

多様な課題とは、ほとんどの生徒が次のどれか1つ以上に該当すると思われる。



小中学校時代に不登校の経験があるという生徒が、半数近くを占める定時制高校もある。多くの生徒は定時制高校への進学を機に「学校生活をやり直そう」と考えて、高校

に通い始める。不登校経験がある生徒は学習面でも「中学校の勉強を学び直したい」という気持ちを持っている生徒が多い。そこで、定時制高校では「基礎学習の学び直し」をカリキュラムに取り入れて、高校生活の定着を図ろうと努力している。

家庭状況の面では、生活保護家庭やひとり親家庭が全日制高校と比較すると高い割合を示す。総じて、親が働くことに汲々としていて生活に追われている為、子どもとのすれ違いやコミュニケーション不足となっている厳しい現状がある。中には、親の代わりに家事全般や下の子の面倒を見ている生徒もいる。

LGBTとよばれる性的マイノリティの生徒も一定程度存在している。LGBTの生徒が自らLGBTであることや性志向の違いや性的な違和感を学校や周囲の生徒に伝えることはまれで、その存在は見えにくい。定時制高校は決められた制服がないところが多く、修学旅行などの集団生活の場面が少ないので、あえて、定時制高校を選択するケースも多い。

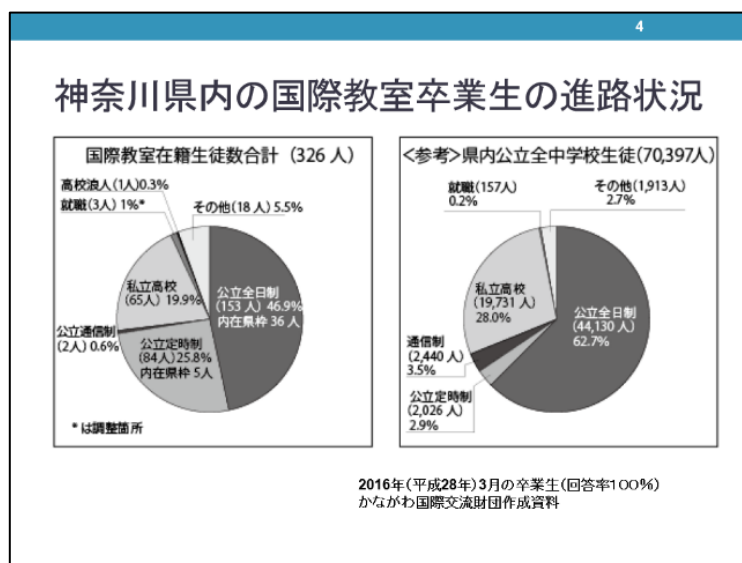
発達課題を抱えた生徒も少なくない。障害者手帳を有する生徒も存在するが、多くは知的障害のグレーゾーンに位置する生徒で、コミュニケーションが苦手であったり、学習の定着が難しかったり、と友達同士の関係作りや安定した学校生活を送ることが課題である。

外国につながる生徒については、ME-netがこれまでも支援対象として関わってきた生徒たちである。「外国につながる」というのは、様々な事情で日本にやってきた海外出身の子どもたちである。親が海外出身で子どもは日本生まれというケースも少なくない。神奈川県内には中国出身の多い中華街を中心とした地域や在日韓国朝鮮人の暮らす川崎地域、ブラジルやペルーなど南米出身の家族が多い鶴見地区や藤沢・平塚地域、かつて大和市に難民定住センターがあったため、その後県営団地などで暮らすベトナム・カンボジア・ラオスの家族が多い大和地域など特定の外国につながる家族が多いという特色を持った地域がある一方、日本人との国際結婚で日本にやってきたフィリピン、タイなどアジアの家族、第二次世界大戦で中国に残されたいわゆる中国残留婦人や孤児の家族、などいろいろな地域で暮らしている。

そうした家族の子どもたちを私たちは国籍によらないため「外国につながる生徒」と呼んでいる。

外国につながる生徒たちが定時制に進学する割合は非常に高い。右図は、かながわ国際交流財団が県内中学校の国際教室の卒業生を対象とした進路調査の結果である。

調査は県内で国際教室の設置されている全中学校を対象に県や市町村教育委員



会の協力の元に実施され、回収率100%である。調査によると、国際教室の卒業生のうち定時制高校への進学者の割合は25.8%である。

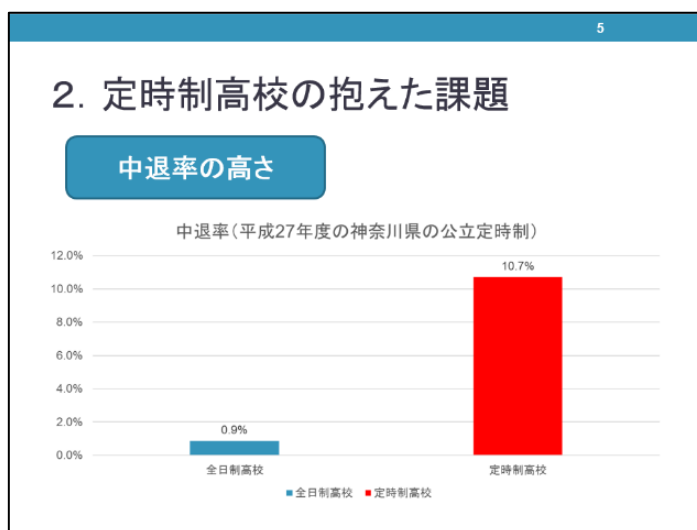
参考として、神奈川県内の全中学生の数値と比較すると、定時制高校への進学割合は2.9%であるので、いかに外国につながる生徒の定時制校への進学割合が高いかわかる。日本に来て間もない生徒が、日本語が十分理解できないまま定時制に進学するケースもあるが、横浜総合高校の場合、日本生まれや幼少期に日本にやってきた生徒が多い。片親が日本人の国際結婚で生まれた子どもで、日本籍を有していて、日本の名前を使っているいわゆる「ハーフ」（「ダブル」や「ミックスルーツ」という呼び方もある）の生徒たちも少なくない。そうした外国につながる生徒の場合、子ども自身に見えない課題を抱えているケースや親とのコミュニケーションで課題が出るケースが多い。

2. 定時制高校の生徒が卒業する割合は？

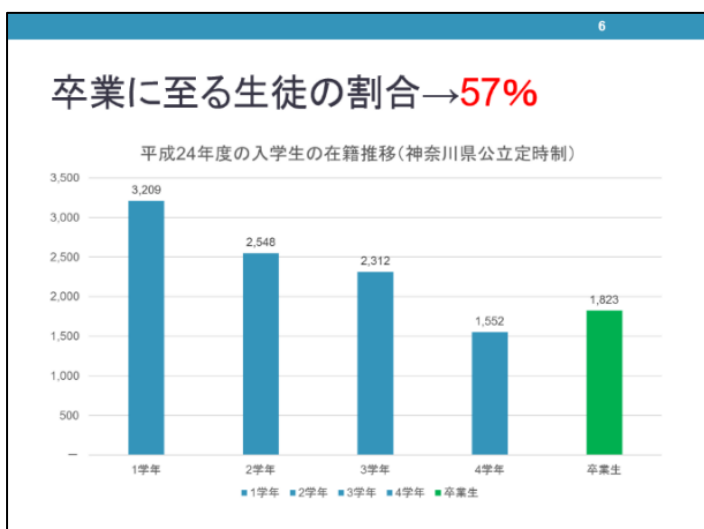
定時制高校の中退者数は神奈川県教育委員会の統計資料で公開されている。それを基にしたものが、右図である。

赤い部分が神奈川県の公立の定時制高校の中退率で、10.7%である。全日制高校の0.9%に比べると10倍以上にもなる。

これは、1年間の数値であるので、例えば、200名の1年生が入学した場合、1年間で20名以上が中退することになる。しかし、1年生での中退者は中学校の時の不登校状態を引きずっている場合も多くさらに多い数字となっていると思われる。



1年間での中退率が10%を超えているということは、卒業するまでの3年間あるいは4年間に右図のように在籍者はどんどん減っていく。平成24年度の定時制高校入学者が卒業する割合は57%という数字になり、いかに中退者が多いかわかる。

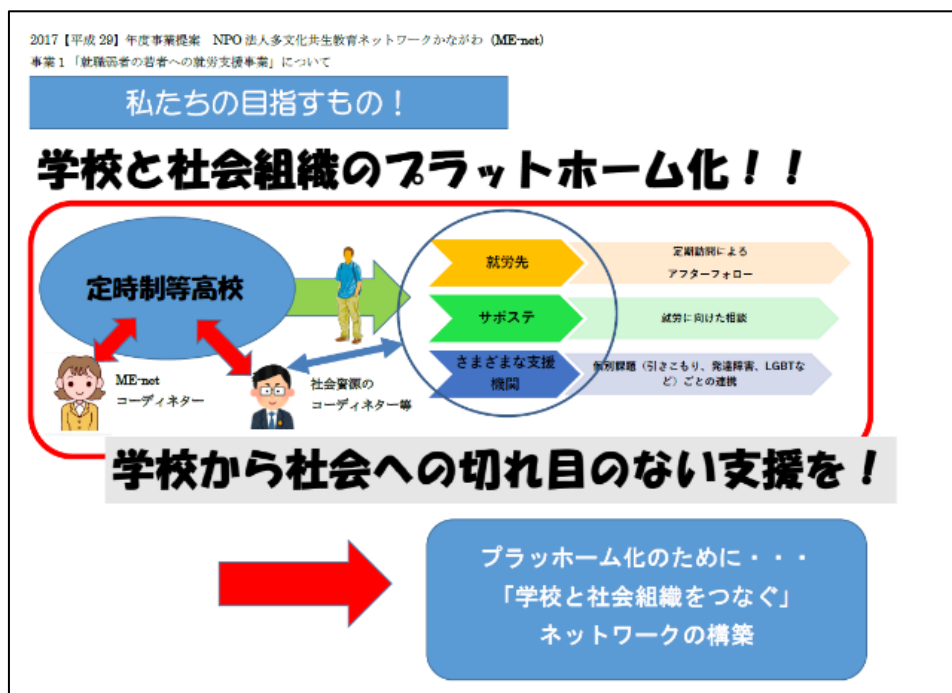


定時制での中退予防や学校生活の安定は必須だが、それとともに卒業後の進路への導き、すなわちキャリア支援が両輪をなしていると考えられる。

3. ME-netが提案する定時制や通信制でのキャリア支援とは。

ME-netは、2015年度かながわボランティア活動推進基金21の協働事業（以下基金21協働事業）に「就職弱者への就労支援事業」を定時制通信制の生徒に特化した支援事業として県に提案し、採択された。2015年度は1年目として定時制5校（県立横浜翠嵐高校、県立希望ヶ丘高校、県立磯子工業高校、県立津久井高校、川崎市立川崎高校）でのキャリア支援を実施した。キャリア支援の内容は次の4つの活動について、そのどれかを高校側と協議して行うものである。大学との連携は、それぞれの大学の特性や地域性など勘案し、大学で公募等をかけていただき、研修を経てキャリア支援の活動にあたってもらった。

- 1) 「キャリアサポートワークショップ授業」…大学との連携により、大学生グループ（5～15名程度）が来校し、キャリアWSコーディネーターとともに授業を企画立案し、高校生の指導にあたる。授業の内容は、コミュニケーションゲーム、ブラックバイトを考える、アサーション、ソーシャルスキル、他者理解、就労トラブルを考える、など
- 2) 「授業等の支援」…ワークショップ授業に向けて、日常的な関係作りのため、大学生が授業支援や行事参加などを重ねて、話しやすい関係を作る。支援をする授業は高校生の基礎学力の定着を図るものやキャリアにつながるものが望ましいが、高校と協議して決める。
- 3) 「カフェ活動」…高校内で、定期的にかフェをオープンし、生徒のフリーな居場所とする。そこで、コーディネーターや大学生が聞き役や相談役となって生徒とコミュニケーションを図り、相談活動につなげる。
- 4) 「相談活動」…キャリア相談コーディネーターが定期的に学校訪問し、生徒の進路（特に就労）相談にあたる。キャリア相談コーディネーターは、基金21協働事業において連携する地域若者サポートステーション（サポステ）など就労に向けて相談支援する機関の相談員などを指す。



この事業の目的は、「キャリア支援活動を通して、大学生との交流を図り、自己表現やコミュニケーション能力を高め、自己肯定感や自己有用感を育てる。また、将来の社会参加のイメージをデザインする楽しさを知ったり、社会参加や就労の不安を相談したりできる場とする。併せてキャリア相談コーディネーターが校内で定期的に相談活動を展開し、就労につなげる支援を行う。」というもので、いわば定時制通信制高校でスタートする社会資源とのつながりをそのまま卒業後にもつなげようというものである。

4. 横浜総合高校での「カフェ活動」の始まりは？

定時制高校でのキャリア支援としての「カフェ活動」の一例として、横浜総合高校での「ようこそカフェ」の活動の成り立ちについて、ご紹介したい。

ME-netは、上記の基金21協働事業の一環として、2015年冬に横浜総合高校でのキャリア支援を校長先生に提案した。その際校長先生が口にされたのは、「同じような趣旨でカフェ活動について、よこはまユースから提案を受けています。」というものであった。まさか、同趣旨の活動提案が2つの団体から出されているとは想像していなかったので、これにはびっくりしたが、幸いよこはまユースとME-netは外国につながる若者の交流活動で協力関係にあり、直ぐに「協働でできないか」協議に入り、それぞれの役割を明確にしたうえで、横浜総合高校でのカフェ活動を共同で再提案し、実施の方向で検討に入ることができた。

5. カフェ活動の実施に向けて

カフェ活動の実施に向けては、半年の準備期間を置いた。準備期間を置くことが結果的に効果的なカフェ活動の実施につながったと思う。

準備期間に実施したことは、次の内容である。

- 1) カフェの実施に向けて、教職員の理解を得るために職員向けの説明会を実施した。
- 2) 全校生徒に対して、集会時にカフェの広報を行った。また、チラシやポスターなどの広報も併せて実施した。
- 3) 事業の趣旨に照らして、特に支援が必要と思われる生徒（進路未定者や卒業猶予者）に対して、カフェのスタッフ予定者がファシリテータとなって、グループワークショップ（コミュニケーションゲームなど）の授業を実施した。また、グループワークの中で、「どんなカフェがいいか」を高校生に問いかけ、カフェへの期待感を高めた。

カフェ活動について教職員の理解を得ることは、カフェ活動の成功のカギになると言っても過言でない。なんの説明なしでカフェ活動を実施すると、「校内に飲み物やお菓子を食べる場所を作って、何をするのか？余計な仕事が増えるだけじゃないのか！」という素朴な疑問を教職員が持っても不思議ではない。外部機関が入って、食堂や購買の延長上でカフェを実施している、と捉えられるからである。カフェ活動が高校にもたらす効果は、実際にやってみないとわからない面があるが、教職員が目的や趣旨を理解し、カフェの様子を見に来てくれるだけでも、生徒側から見ると先生方がカフェ活動をプラスのものとしていることになり、生徒にとって居心地の良い安心できる場につながる。横浜総合高校のカフェは常に先生方が様子を見に来てくださるので、まさに生徒たち

にとっても居心地の良い場所になったと思う。

もう一つ、カフェ活動の重要なカギとなるのは、支援の必要な生徒がカフェにやってくるかどうか、である。カフェ活動において最も懸念されるのは、利用者の固定化である。様々な生徒とスタッフの交流機会がないと、カフェにやってくる生徒はある意味自ら行動できる社交性のある生徒で、コミュニケーションの苦手な生徒にとっては、カフェがあっても「知らない人（スタッフ）がいる」「いつも同じメンバーが利用しているので行きにくい」場所になってしまう。横浜総合高校では、教職員の理解が得られ、カフェの実施前に前述の3)にあるように、より支援の必要な生徒とコミュニケーションを図れたことが1日平均約200名の利用につながったものとする。カフェ実施の初日からグループワークで知り合った生徒たちがニコニコしながら大勢やってきたことが物語っている。

6. 大学生スタッフの役割

カフェのスタッフは、様々な人が関わることで社会の接点として機能も打つことができる。その中で、大学生の役割も大きなものがある。それは、生徒との年齢が近く、気軽に話し相手や相談相手になれたり、ロールモデルとしての役割が生まれたりもする。しかし、「どんな大学生が来るのか？生徒との関係が心配だ。」といった教職員の懸念があるのも当然である。そこで、ME-netでは、大学生に対して研修を実施し、個人情報保護、定時制高校の状況についての学習、「傾聴」についてのスキル取得の実習を行っている。横浜総合高校では、横浜市立大学のボランティア支援室の協力を得て、教職を希望する学生2名、県立保健福祉大学の看護学部の学生2名、ME-netの活動にボランティア参加している外国につながる学生2名（中国ルーツの東京理科大学の学生とブラジルルーツの上智大学の学生）、計6名の大学生が約60%以上の参加率でスタッフ参加した。この6名はとても意識が高く、積極的に高校生との交流を図るなど、十二分に役割を果たしていたと思う。それと共に毎回カフェ実施後にスタッフ全員で振り返りを行って、生徒からの相談や気が付いた点など情報共有を図ることで、さらに意識が高まったと思う。振り返り共有は、大学生が生徒の悩みなど相談を受けたことで、自分自身で抱え込んでしまっていて悩むようなことがないようにするためにも大切である。また、これらの振り返りの内容は高校側に伝え、高校として効果的な支援のための手がかりにしてもらった。

7. 大学生の感想から・・・

ここで、大学生スタッフの感想を紹介する。

私は初めに横浜総合高校でカフェを開催すると聞いたとき、高校生はカフェを利用してくれるのだろうかという不安がありました。なかなか学校に来ることが難しい生徒や知らない人が集まる場所に来ることが苦手な生徒もいると思ったからです。しかし、実際にカフェがオープンしてみると多くの生徒が訪れ、楽しそうにしている様子を見て当初抱いていた不安は消えてゆきました。そして嬉しさを感じるが多くなりました。

カフェは毎週水曜日に行われているため、定期的に高校生と話をすることができ、徐々に仲良くなるのが出来ました。すると高校生が、友人関係のこと、アルバイトのこと、勉強や将来のことなどについて悩みを打ち明けてくれるようになりました。印象に残っていることは、いつも元気で笑顔が絶えず友達と仲良く話しているAちゃんが、ある日一人でスマートフォンを眺めていました。私は寂しそうだと感じたので、「どうしたの？何かあった？」と聞くと最近友人関係に悩んでいるということでした。カフェを通じて悩みを相談できる人と出会えると同時に、スタッフの側も高校生の変化に気付くことが出来るというのが定期的にカフェを開催する利点だと感じました。

また、「カフェがなかったら水曜日じゃない！」「毎日カフェやってほしい！」と言ってくれる高校生もいます。このような言葉をかけてもらえると私はとても嬉しい気持ちになります。それと同時にカフェが高校生の「居場所」として大きな役割を果たしていることも感じられます。授業がない時間はずっとカフェにいる生徒もいれば、授業やアルバイトに行く前に立ち寄る生徒もいます。「バイト行きたくない～」という生徒に「大変だよ。でも頑張ってるね！来週もカフェあるから、来週また会おう！」と声をかけ生徒が「うん！来週ね！じゃあ行ってきます！」とアルバイトに行くという光景はよく見られ、カフェでの人間関係がエネルギーになっている、と感じられることもあります。

カフェでは高校生とスタッフとの関係だけではなく、もちろん高校生同士の関係も広がっています。例えばトランプやUNOなどのカードゲームを高校生とする際に、その生徒が話したことがない他の生徒も呼んで一緒にゲームをすることがあります。ゲームを通して初めて話した人とカフェ以外でも交流したという話を生徒から聞くと、カフェが様々な人とふれあう場にもなっていると感じます。

そして問題や課題の発見というのがカフェの役割の中でも重要だと感じています。カフェではお菓子や飲み物のほかに春雨や行事に合わせた食べ物を提供しています。中にはお菓子を大量に鞆に詰め込んだり、お昼ご飯を買うお金がないからと言って春雨をずっと食べたりしている生徒がいます。その場合はスタッフ同士で情報を共有し、学校とも協力して、その様な生徒の支援方法を考えていきます。カフェでの目に見える行動は支援方法を考えるきっかけとなっています。

半年間のカフェ活動を終えて、「来年もカフェやってくれるよね？」という声を多く聞きました。やはり生徒の多くにとってカフェは必要な居場所であることの表れだと思います。この半年間で高校生と関わる中で感じたことや学んだことを来年度にも活かし気持ちが不安定になる新入生の支援にも役立てたいと思っています。

8. カフェの定着に向けて

さて、カフェが継続していくためには、人材面や資金面で安定した基盤づくりをどのように作っていくか、課題は多い。ME-netが受託した基金21協働事業は、最長5年という期限があり、長くても2019年度で終了する。その後継続していくには県や市などの行政機関を巻き込んで知恵を出し合っていく仕組みが必要である。カフェ活動の意義や効果を社会に伝え、支援の高まりを創りだしていく役割が私たちに求められている。

高校カフェの「居場所」と「相談」機能

横浜市立大学教授 高橋寛人

高校「居場所カフェ」とは

「居場所カフェ」とは、困難を抱える生徒の多い高校で、毎週1回か隔週で、学校内の空き教室、オープンスペース、図書館などで居場所づくりをふまえた交流相談をおこなうものである。教師ではなく、団体のスタッフやボランティアが話し相手となる。ボランティアは大学生のほかに地域の大人のボランティアが相手をすることもある。一般の学校カウンセリングと異なって、相談室を使った個別相談ではない、相談のない生徒も自由に参加できる。

ドリンクやお菓子を無料で提供する。生徒が紙コップを取って、ボランティアかスタッフに渡してドリンクを注いでもらう。ボランティア・スタッフと生徒との間の交流が生まれやすくするためである。生徒とボランティア大学生、生徒とスタッフ、そして生徒同士もドリンクを飲んだりお菓子を食べながら交流する。

各高校の「居場所カフェ」では、当初、クッキーやパイなどの菓子類を出していた。そのうちに、ミニカップラーメンや、カップ味噌汁、カップスープなども提供し始めた。お菓子よりもこれらを求める生徒が多い。十分な食事を取っていないからではないかというのが、関係者の推測である。

何週間にもわたる継続的な交流の中で、人間関係、信頼関係を形成していく。その中で、困難を抱える生徒がボランティアやスタッフに率直に相談できるようになる。今日の生徒が抱える困難は複合的である。生徒自身、具体的に何と何が困難か、それらがどのように関係し合っているか認識することは容易ではない。話し合いの中で、それが明らかになっていく。毎回、カフェ終了後に、大学生その他のボランティア、運営団体のスタッフと学校の教職員が振り返りを行う。

不登校・ニート・ひきこもりの子どもへの支援、若者就労支援、メンタルサポート、外国につながる子どもの支援、障害を持つ子どもへの支援、生活困窮者の支援などに実績を持つ民間団体が運営している。支援が必要な生徒には、スタッフの中の専門家が対応したり、外部専門機関につなげていく。

生徒主体の問題解決の必要性

ところで、子どもに対する支援については、子どもの発達段階によって、支援のあり方が異なってくる。子どもの生活上の困難を改善するには、小学生の場合、子ども自身の努力よりもむしろ保護者の生活・行動の改善によるところが大きい。他方、高校生の場合は、保護者よりも子ども自身の努力が成否の鍵を握っている。高校生は何よりも自らの力で努力し、保護者にも働きかけていくことが必要である。

子どもが専門家に相談するためには、子ども自身が困難を認識しなければならない。例えばカウンセリングルームを生徒が訪れるためには、自分の抱える困難の解決のためにカウンセリングが役立つ可能性があることを知っている必要がある。しかし、「居場

所カフェ」を開いている高校の生徒の困難は、複合的なものが多い。そこで、生徒自身が自分の抱えている困難が、何と何であるかを自覚できないことが少なくない。子どもたちは、だれに支援を求めたらよいかわからない。

また、虐待など両親から大切にされてこなかったり、小中学生時代に学業成績がよくなかったり、得意なことがない子どもは自己肯定感が低く、大人にしかられた経験は豊富でもほめられた経験が少ない。相談室という閉め切られた部屋の中で、知らない大人と一対一で話す、しかも自分の私生活の問題点をさらけ出すのは、非常に大きな不安である。自分の困難を他人に打ち明けて相談するには、相談する相手に対する不安が取り除かれていなければならない。

「交流相談カフェ」では、専門家だから相談するのではなく、人間関係ができて「この人なら相談できる」と思うから相談する。そこで、高校生相手の「交流相談カフェ」の支援者には、人間関係を作ることが重要な役割となる。大人の場合は専門家や専門機能という肩書きや看板を信頼して相談に行く。しかし、ハイティーンは、相談相手がどのような人間かわからなければ相談には行かない。カウンセリングに行くよう教師からすすめられても、相談室に生徒が行かない大きな理由はここにある。これに対し、高校「居場所カフェ」でスタッフに相談するのは、専門性よりも交流の中で生まれた信頼である。

高校「居場所カフェ」の意義と効果

さて、校内に相談場所を作って生徒の持つ困難に対処しようとしても、生徒が来なければ相談にのることはできない。そこで、生徒が自らの困難を安心して語られるようにするために、気楽に集まって話しあい、相談できるような居場所を用意することが必要となる。椅子と机を置いているだけでは、高校生は立ち寄らない。ドリンクやお菓子や軽食を用意し、タダで食べてよいとすると非常に多くの生徒が集まる。ドリンクを飲んでお菓子を食べる、来てもいいし来なくてもよい。

ふだんは欠席しがちなのに「居場所カフェ」の日になると休まずに登校するという生徒がいる。毎回、「居場所カフェ」が店じまいするまで、カフェに残っている子どもがいる。家が居場所でないのだという。

高校生の中退率は、2015年度で49001人で全体の1.4パーセントである⁹。ただし、中退する生徒は特定の学校に偏っている。入学難易度が低い高校ほど中退率が高い。定時制高校の場合、1年生の段階ですでに19.0パーセントが中退している¹⁰。中退させないために、学校につなぎとめる必要がある。「居場所カフェ」は、中退防止にも効果的である。

交流相談を通じて、困難を明確化し、生徒が主体的に解決に取り組むよう支援し、必要に応じて関連の外部専門機関につないで、困難を軽減することが高校「居場所カフ

⁹文部科学省初等中等教育局児童生徒課『平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値)について』平成28年10月27日、103ページ。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/_icsFiles/afieldfile/2016/10/27/1378692_001.pdf

¹⁰ 同前、108ページ。

エ」の役割である。

高校生が主体的に問題解決を行おうと考えるためには、生徒自身の自己肯定感を育む必要がある。自己肯定感は、子どもの時、周囲の人々から大切にされることによって育つ。いろいろな人に大切にされるから、自分を大切に思うのである。また、自分が有用だと感じることで、自己肯定感は高まる。勉強やスポーツができると自己有用感を持つことができ、自己肯定感も持つことができる。

一般的な環境で育った人々には理解しにくいかもしれないが、困難な環境で育った子どもたちの場合、かまってもらえる、自分に関心を持ってもらうという経験が極めて乏しいケースがめずらしくない。自分が大切にされていると感じることが、生徒たちにとって大きな喜びである。実際、「話を聞いてほしい」という生徒たちのニーズは非常に高い。高校カフェを「居場所カフェ」とも呼ぶ理由もここにある。居場所とは、そこではだれもが存在を肯定される空間である。

外国につながる子どもたちの中には、日本語力が不十分なため、入学難易度の低い高校や定時制に進学するケースが多い。外国につながる子どもたちにとって、母語で話ができることや母語で書かれた若者向けの雑誌や図書・漫画に触れることは、喜びであり、母語の維持・向上に有益である。そこで、カフェに、中国語、タガログ語、ポルトガル語などの雑誌を置いて、手にとって読めるようにしておく。また、大学生ボランティアの中に、中国人などの留学生が参加すると、子どもたちはとても喜んで母語でおしゃべりし続ける。

子どもの貧困が社会問題になっている。貧困によって人々は、日々の食事や衣服に事欠くだけでなく、文化にふれる機会も制約されていく。旅行をしたり映画を見たりすることはもちろん、本を買うのも容易ではない。電車賃やバス代の負担も大きいので、街に出かける機会も減っていく。

「居場所カフェ」は、高校生に文化的な環境を提供することを意識している。田奈高校の「ぴっかりカフェ」は、カフェを図書館で開くことで、生徒たちが図書に触れる機会を増やしている。司書の松田ユリ子さんは、若者に関心を持ちそうな本を目立つように展示している。写真集やミュージシャン関係の図書なども並べている¹¹。「ぴっかりカフェ」を運営している NPO 法人パノラマの石井正宏さんは、カフェで子どもたちに「文化のシャワー」を浴びせようと、ウクレレ、コーヒーミル、アフリカの楽器などを持ち込んだり、洋楽を流したりしている。

高校「居場所カフェ」には、大学生、若者支援に実績をもつ支援団体のスタッフ、さらには地域の大人もボランティアとして関わる。様々な人々と関わることで、生徒たちの人間関係が豊になり、社会に対する理解も広がる。さらに、若者支援を通じて様々な団体が参加し、地域の人々のつながりが生まれる。今日、子ども食堂が全国的な広まりを見せている。子どもや若者の支援には、地域の団体や個人から様々の寄付が寄せ

¹¹松田ユリ子「ぴっかりカフェが学校図書館にもたらした意義の検討」（『神奈川県立田奈高校での生徒支援の新たな取り組み— 図書館でのカフェによる交流相談を中心に—』横浜市立大学、2016年3月。 http://www.yokohama-cu.ac.jp/lc_center/academic/kyouin_chiikikouken/pdf/h27_tana_high_cafe.pdf

られ、ボランティアも集まる。高校「居場所カフェ」は、地域の人々の間でも交流の場となるのである。子どもや若者のために、地域の人々の間のつながりが拡大・強化されることは大きな副次的効果といえよう。



高校居場所交流相談カフェの特長

- ① だれでも来ることができる（立ち寄るだけでも、長居してもよい）
- ② ドリンク・お菓子などがタダで飲み食いできる
- ③ 話を聞いてくれる大人がいる（大学生、地域のボランティア、若者支援スタッフ）
- ④ 毎週または隔週で継続的に開催する
- ⑤ 支援が必要な生徒を外部機関につなげる

[資料] 平成 28 年度研究会開催状況等

日時：7月15日（金）18:30-21:00

場所：横浜市立大学金沢八景キャンパス文科系研究棟2階第2会議室

テーマ：川崎と鶴見での居場所づくりとまちづくり

報告者：鈴木健さん（川崎市ふれあい館）

須田洋平さん（未来共想オフィス）

日時：2016年8月5日（金）午後6時30分～午後8時30分

テーマ：生活困窮家庭の子どもの学習支援を考える集い

----外国につながる子どもの支援&市民からの寄付の使い方について----

場所：JR根岸線桜木町駅前 桜木町ぴおシティ

報告者：木村博之（横浜市国際交流協会 YOKE）

日時：2017年1月22日 14:00 - 16:30

テーマ：学校が居場所カフェから変わる

場所：横浜市立大学金沢八景キャンパス ビデオホール

シンポジスト

- ・中田正敏（前々田奈高校校長、明星大学特任准教授）
- ・高橋寛人（横浜市立大学国際総合科学部 教授）
- ・田中俊英（一般社団法人ドーナツ・トーク 代表）
- ・鈴木晶子（一社インクージョンネットかながわ 代表理事）
- ・松田ユリ子（神奈川県立田奈高等学校図書館司書）
- ・石井正宏（NPO 法人パノラマ 代表理事）

日時：2017年2月22日水曜日 18:30-20:30

場所：横浜市立大学金沢八景キャンパス 文科系研究棟1階大会議室

テーマ：横浜市寄り添い型学習・生活支援を考える

参加者：横浜市寄り添い型学習・生活支援事業担当スタッフ

内容：昨年度に引き続き、横浜市の寄り添い型学習等支援事業に携わっている方々に事前にアンケートを行った。そしてこの日の研究会に参加いただいた。アンケート結果の報告の後で、成果や支援をすすめる上での課題・要望などについて話し合っていた。

執筆者一覧

天野 真人 横浜市立横浜総合高等学校長
飯森 収 横浜市立横浜総合高等学校主幹教諭
富岡 克之 公益財団法人よこはまユース職員
尾崎万里奈 公益財団法人よこはまユース職員
鈴木 弘美 横浜メンタルサービスネットワーク理事
高橋 清樹 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ (ME-net) 事務局長
高橋 寛人 横浜市立大学都市社会文化研究科教授

横浜市立横浜総合高校（定時制 3 部制単位制高校）におけるカフェ相談 活動の取り組みと意義

平成 28 年度 教員地域貢献活動支援事業（インキュベーション型）報告書
研究課題名：横浜市立横浜総合高校（定時制 3 部制単位制高校）におけるカフェ相談活動と
その研究

平成 29(2017)年 3 月 31 日発行

編集： 高橋 寛人
連絡先：〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学都市社会文化研究科
TEL 045-787-2311(代)
E-mail hirotota@yokohama-cu.ac.jp